

## 教室場面における談話の構造

横須賀柳子 (国際基督教大学)

### I はじめに

授業の評価は、教師、学習者の両方の立場から語られることが多いが、「今日の授業はよかった、おもしろかった」というように主観的な感想の域を越えていないのが現状である。従来、英語においては Sinclair & Coulthard(1975)を先駆けに教室場面での談話の分析についての研究がなされている (Long & Sato 1983, Coulthard 1985, Das 1987) が、日本語ではまだその数は少ない。(Kubota 1982)

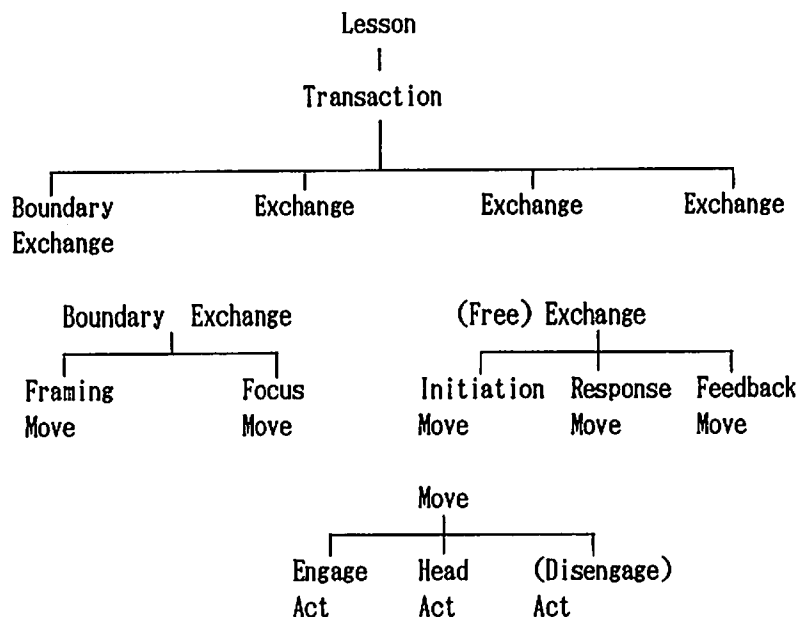
本発表では、授業の流れを形成している談話の構造を Sinclair & Coulthard (1975)の用いた分析方法に基づいて客観的に分析し、教師と学習者間のインタラクシヨンの実態を明らかにすることを目的とする。

### II 方法

- 1) 被験者： 教師： 男性、教師経験 2年  
母語は日本語だが、ネイティブレベルの英語を話す  
学生： 1990年度モナッシュ大学日本語学科レベルA (初級)  
女性13名、男性1名
- 2) 授業内容： テキスト、「モナッシュ大学日本語学科レベルA:会話」を使用。主な教室活動は ①前回の復習 (形容詞+そう)、②\*ビジター・セッションの準備; ビジター・セッションの説明、です/ますfrom→plain formのドリル練習、ビジター・セッションの疑似練習、ビジターと話すトピックの語彙確認、言い方のドリル練習、グループごとの質問作り  
  
\* ビジター・セッション：教室に教師以外の日本人を招き、特定のトピックについて会話させる授業。いわゆる伝統的な語学の授業形態 (教師対学生) から逸脱した状況を教室の中に設定し、実際の日本人との接触場面を体験させることを目的としている。本調査のトピックは「日本人の家庭生活について」。
- 3) 調査方法： 教師、学生の全発話 (1時間) をテープレコーダーで録音し、それを文字化した。
- 4) 分析方法： それぞれの発話をSinclair & Coulthard (1975) のモデルに従って、まず、Act-Move-Exchange-Transactionの順に分類し、全体の談話の構造を組み立てた。(図2) 次に、Exchangeの形式を「IRFモデル」; 発問 (Initiation) - 応答 (Response) - フィードバック (Feedback) に従って分

類し、その種類別の頻度を出した。各Exchangeをその内容（言語に直接関係する内容か／一般的な内容か）と使用された言語との二つの観点から、分類し、使用頻度を示したものが表1である。また、理想とされているIRFモデルと現実に現れたExchangeの形態を比較し、その差異の原因について検討を試みた。モデルとしたSinclair & Coulthard (1975) のLessonの構造は次の通りである。

図1



### III 結果及び考察

#### 1. Transactionの構造

本授業を図式化したものが図2である。Boundary Exchangeを手がかりとして、Lessonを細分化してみると、14のTransactionから構成されていることが分かった。つまり、この14のTransactionがいわゆる授業の流れ、というものを組織しているわけである。（図2参照）

#### 2. Exchangeの構造

ExchangeにはBoundaryとFreeとの二つのタイプがある。Boundary ExchangeはTransactionの開始と終了を示し、境界を引くものであり、Free Exchangeは授業の進行に関わる各ステップを表すものである。本調査では、1) Inform：事実や意見、情報を与える、2) Direct：ある作業を指示する、3) Elicit：質問する、4) Check：理解を確認する、5) Re-Initiation：不確かなことを再度、質問、確認する、6) Listing：複数の回答を期待する、7) Drill：語彙、表現などを機械的に練習する、の七つ

のFree Exchangeが観察された。ここでは、Sinclairらの分類に Drillという新たなExchangeを加えた。パターンプラクティスなどのドリル練習が多く観られたからである。もう一つ、本調査とSinclairらの分類で異なる点は、Sinclairらは教師の開始する談話を基準としているのに対し、本調査では学生が開始する談話もExchangeを分類する基準として加えた点である。よって、七つのExchangeのうち、Direct、Check、Listing、Drillは教師開始型であるが、InformとElicitとRe-Initiateは、教師開始型と学生開始型との両方の場合が認められた。

本資料の大きな特徴はこの学生開始型のExchangeが多い点にある。Transaction 8の後半のExchangeの構造はほとんどが学生開始型Elicit/Informであり、これは他のTransactionにはみられないパターンである。この特徴は、実際の日本語話者に接するビジターセッションの準備段階として、教室活動内にシミュレーションを設定したところに起因する。

<D1> Transaction 8 (シミュレーション)での学生開始型Elicit

Initiation	Response	Feedback
ミマセンガ、オマワリナゲスカ↑	ナマデスカ↑ アノ、スギキマス。	スギキマス↑ア、ソウデスカ。

このパターンによって学生は、教師の先導する発問、指示に反応を返す立場から、一転して、自分が能動的に発話していく立場に立つことになる。疑似的な役割とはいえ、教師-学生という立場ではなく、個人-個人の立場で交わすインターアクションは教室外の実際の場面に極めて近いものを提供している点で有効であると思われる。

使用言語という観点からも学生の「日本語を使う」意識を高める上で、このような教室活動は有益だと思われる。シミュレーション以外の教室場面では、教師開始型の発話が60%以上も占めるが、学生開始型のExchangeは表れてもそのほとんどが英語でなされている。(表1)これに対し、シミュレーション内では学生開始型がほとんどで、使用言語は日本語のみである。このシミュレーション、あるいはその一段階上のビジターセッションの実質的な効果については実証されたわけではないが、それが証明されれば、伝統的な教室活動から脱した言語活動の有効性を唱えることもできるのではないだろうか。

### 3. Moveの構造

Free Exchangeは先述のInitiate-Response-Feedbackという三つのMoveによって構成されており、その構造はExchangeの種類によって異なる。本来要求されているMoveの構造通りに談話が進めば授業はスムーズに進行し、その構造が崩れたとき、授業の流れに混乱が起きることになる。

本来の構造 Elicit: I R F  
 Direct: I R (F)  
 Inform: I R (F)  
 Re-Initiation: I R I° R F

<D2>は混乱が起こったときの例である。

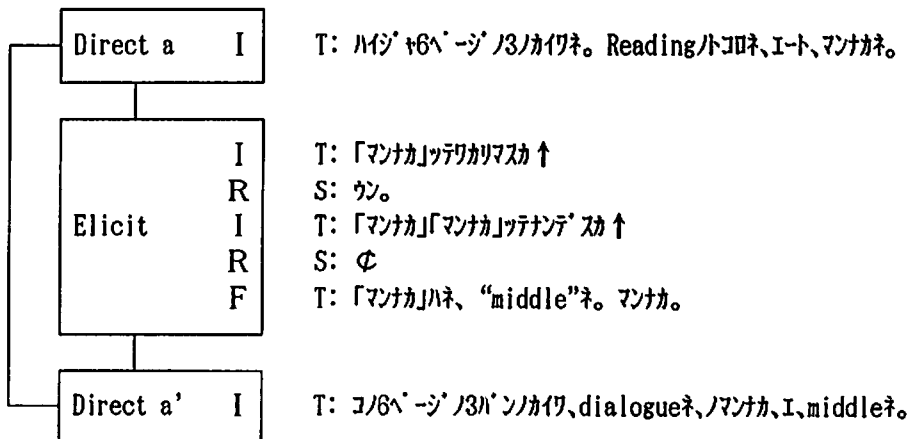
<D2>ピクチャーに自分が話すトピックを教える言い方を練習をしているとき

	I	R	F
Elicit 1	コレ、レジャー・アクティビティが「タイムス」 コレ、アノ イデオロギカル↑	Φ反応なし	
Re-Initiate	イデオ ↑	Φ	
Direct	「アノ レジャー・アクティビティが「タイムス」 コレ、イデオニジカルイ。	Φ	
Elicit 2	イデオロギカル↑コレ。	S1 イデオロギカルイ... S2 <英>xxx	ン↑  Yea, "I would like to"ネ。

本来の構造が実現しなかったElicit 1, Re-Initiate, Directでは混乱が生じ、教師が質問や指示の形を変えて、やっとElicit 2で要求される構造が実現することによって混乱がおさまる。この混乱の要因はいろいろ考えられるだろうが、教師側の原因としては、指示の不明確さが指摘できると思う。本来ここで教師が学生に要求していることは「アノ、レジャー・アクティビティが「タイムス」」を練習することなのだが、それを実現するまでに語句の意味を英語で確認するなど、他の作業をさせたために、学生の混乱を招いた可能性が強い。

このように、一つのExchangeの中に他の種類のExchangeが入り込む「埋め込み構造」は本データの中ではしばしば観察された。特にある指示を与えることを本来の目的としているDirect中に語彙を確認するElicitが現れるケースが多い。

<D3> 教科書を見るように指示するとき



初級の授業では、学生の理解できない部分を排除しようとする努力からこのような埋め込み構造が多く構成されるのだろうが、教師は本来要求している指示が学生に明確に伝わるように注意しなければならない。

この他、学生の混乱を招く要因として、日本語の形態の問題が考えられる。例えば、日本語で「～してください」と指示した場合、その反応は二つの異なる時制に起こる。

<D 4> 教科書を見るように指示するとき

I	⋮	R
ジ'ア'ネ、6'ア'ー'ジ'マ'シ'カ'ガ'サイ、6'ア'ー'ジ'。		Non-Verbal (教科書をみる)

<D 5> パターン練習をするとき

I	⋮	R
...「 <u>ニホ'デ'ナ'マ'シ'カ'カ'コ'レ</u> <u>polite formニシ'カ'ガ'サイ。</u>		「 <u>ニホ'デ'ナ'マ'シ'カ'カ'↑</u> 」

この二例は学生の即時的な反応を求めているが、次の例は即時的な反応を要求しているのではなく、未来の時制においてその動作をすることを期待しているだけである。この場合は、指示というよりも未来の行為についての「説明」という要素が含まれているのである。

<D 6> ビジターに自分が話すトピックを教える言い方を練習する前

I	⋮	R
...グ'ル'ブ'デ'イン'ビ'エ'ス'ト'キ、 グ'ル'ブ'デ'イン'ビ'エ'ス'ト'キ、ア、 <u>ト'ビ'ツ'ク'ト'ピ'ク'ガ'サイ。</u>		∅

この時制の違う二種の指示は、形態的に同一で機能的にも類似しているので、その二つが近くの話に現れたとき、学生の混乱を招いた場面があった。

<D 7> ビジターに自分が話すトピックを教える言い方を練習するとき

	I	⋮	R
Direct	...ジ'キ、グ'ル'ブ'1'ノ'ヒト、 <u>ト'ビ'ツ'ク'ト'ピ'ク'ガ'ジ'ター'ニ'イ'テ'カ'ガ'サイ。</u>		
Direct	<u>オ'シ'テ'カ'ガ'サイ、ト'ウ'ジ'。</u>		∅
Direct	イン'ビ'エ'ス'ト'キ、ハイ、イ'マ、コレ、		
(Drill)	「ア'ノー」、xxサン、「キョウ」エ'ト、 「ア'ノー」ト'ウ'ジ、「ア'ノー」		∅
Direct	ン、グ'ル'ブ'1'ノ'ヒト、エ、 <u>ト'ビ'ツ'ク'ト'ピ'ク'ガ'サイ、イ'マ。</u>		
(Drill)	「ア'ノー セイ'カ'ニ'イ'テ...」		「ア'ノー'セイ'カ'...ト'ウ'カ'イ'ン'デ'ス'ガ'」

教師は一応「ドウゾ」「イマ」という語を使ったが、学生にはその意図が伝わらなかったのである。「このパターンをみんなで練習しましょう。」などの明確な指示があれば、教師の要求がはっきりしただろう。

学生からの反応の欠如はこれ以外にもいろいろ考えられるだろう。例えば、学生の言語能力不足の問題；a)質問自体がわからない、b)質問の回答がわからない、c)回答の仕方がわからない、などが挙げられる。この他、発言しようとする意志を抑制する心理的問題も考えられる。教師はこうした原因を排除し、本来要求されている談話の構造を実現しながら、授業を円滑に進めていかなければならないのである。

#### 4. Actの分類

Actは談話の構造中、一番下位に位置づけられた発話の単位である。Sinclairらは、平叙文、疑問文、命令文、ムードなしの四つの形によって表される文を21のActに分類した。本調査では、各Actの機能、形態、意味的特徴を考慮の上、さらに10のActを加えることにした。

#### IV. おわりに

以上、本発表では教室内の談話の構造がいかに組織されているかについて分析と考察を試みた。今回は一授業を対象にした記述的な研究にとどまらざるを得なかったが、教室内の談話がSinclairらの明らかにした構造に即して整然と組織されていることが判明した。今回の分析で、談話の構造が崩れたときに起こる混乱については判明したが、それをいかに修正すべきか、回避すべきか、その手段を解明するまでには至らなかった。また、授業の種類や学習者のレベル、シラバスの構成の仕方、教師-学生間の人間関係などの違いによって談話の構造がどう変化するか、比較検討してみることも残された課題である。しかしながら、このように授業を客観的に分析する方法を使うことは、教師が自分の教え方を認識し、そこで起こった問題などについて反省を加えることができるという点において意義のあることと思われる。

#### 参考文献

- 国立国語研究所 1987 国立国語研究所報告92 「談話行動の諸相 座談資料の分析」 三省堂
- ザトラウスキー・ポリー 1986 『談話の分析と教授法(1)』 「日本語学」Vol.5 No.11
- 南不二男 1983 「談話の単位」 国立国語研究所
- 水谷信子 1983 『あいづちと応答』 「講座日本語の表現3 話しことばの表現」 筑摩書房
- Brown, G. & Yule, G. 1983 Teaching the Spoken Language Cambridge University Press
- Coulthard, M. 1985 An Introduction to Discourse Analysis Longman
- Das, K.B. Ed. 1987 Patterns of Classroom Interaction in South East Asia

Continental Press

- Freed, F.B. 1981 "Foreigner Talk, Babay Talk, Native Talk"  
International Journal of Society and Language
- Halliday, M.A.K. 1973 Explorations in Language Study Edward Arnold Ltd.
- Hinds, J. 1976 Aspects of Japanese Discourse Structure Kaitakusha
- Krashen, S. 1985 The Input Hypothesis Longman
- Kubota 1982 "Language Problems of Japanese Children in Melbourne"  
M.A. Dissertation, Monash University
- Long, M.H. & Sato, C.J. 1983 Classroom foreigner talk discourse; forms  
and functions of teachers' questions. In Seliger, H.M. & Long, M.H.  
Classroom Oriented Research in Second Language Acquisition Newbury  
House
- Neustupny, J.V. 1989 Strategies for Asia and Japan Literacy Japanese  
Studies Centre in Melbourne
- Sinclair J.McH. & Coulthard R.M. 1975 Towards and Analysis of Discourse  
The English used by teachers and puples Oxford University Press

<資料 1>

表1

( )は%

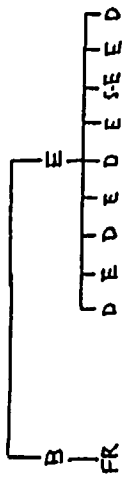
Exchange	日本語			英語		
	菅語	一般	計	菅語	一般	計
教師開始型 Direct	18	23	41 (20.5)	1	2	3 (1.5)
Elicit	20	9	29 (14.5)	4	2	6 (3)
Inform	9	10	19 (9.5)		5	5 (2.5)
Check		12	12 (6)			1 (0.5)
Re-initiation	2	3	5 (2.5)	7		7 (3.5)
Drill	5		5 (2.5)			
計	54 (27)	57 (28.5)	111 (55.5)	12 (6)	10 (5)	22 (11)
学生開始型 Elicit	3	1	4 (2)	10	15	25 (12.5)
Inform	1		1 (0.5)	5	1	6 (3)
Re-initiation				1		1 (0.5)
計	4 (2)	1 (0.5)	5 (2.5)	16 (8)	16 (8)	32 (16)
<原初練習時> 学生開始型 Elicit	16		16 (8)			
Inform	5		5 (2.5)			
Re-initiation	1		1 (0.5)			
計	22 (11)		22 (11)			
ビジター(教師)開始型 Elicit	5		5 (2.5)			
Inform	3		3 (1.5)			
計	8 (4)		8 (4)			
合計 200(100)	88 (44)	58 (29)	146 (73)	28 (14)	26 (13)	54 (27)



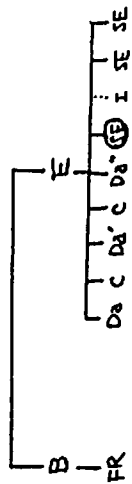




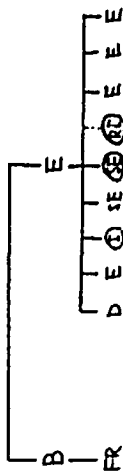
Transaction 10 [7/11-7\*補成]



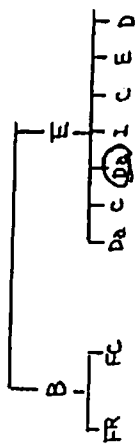
Transaction 11 [7/11-7\*7質問作成]



Transaction 12 [11の質問作成]



Transaction 13 [講法憲]



Transaction 14 [おしゃべり]



凡例

- B: Boundary Exchange
- E: Exchange
- FR: Framing Move
- FC: Focus Move
- I: Inform
- D: Direct
- E: Elicit
- C: Check
- RI: Re-Initiation
- L: Listing
- Dr: Drill
- SD: Student-initiate  
(何も書かないものは全て teacher-initiate)
- : 英語でなされたもの
- /: 同じ内容のもの